

成果報告書 概要

2011 年度助成		(実践期間：2012 年 4 月 1 日～2013 年 12 月 31 日)	
タイトル	価値ある体験を生み出す、地域の自然を生かした環境学習		
所属機関	相模原市立麻溝小学校	役職 代表者 連絡先	学校長 門倉 松雄 042-778-0259

対象	学年と単元：	課題
○ 小学生	・第 1 学年 学校農園や公園での活動	教師の指導力向上を目指す教員研修、実験方法指導、教材開発
中学生	・第 2 学年 サツマイモの栽培活動	
教員	・第 3 学年 道保川の動植物と関わる活動	子ども達の科学的思考能力の向上を目指す授業づくり、教材開発
	・第 4 学年 季節と生物	
その他	・第 5 学年 学校農園での稲作体験	ものづくり(ロボット製作等)による、科学分野で活躍する人材の育成
	・第 6 学年 地域を見つめ直す活動	
		○ その他



実践の目的：	本校の学区にある自然環境をより効果的に活用するために、従来の活動が児童にとって「価値ある体験」であるかを見直し、その「価値ある体験」を積み重ねることで、児童が地域のことを好きになり、地域のことをよりよく知ろうとする態度や、将来にわたって地域に関わっていこうとする気持ちをもてるようにする。
実践の内容：	①地域の自然環境と関わる活動が、児童にとって「価値ある体験」となるように活動内容と授業展開を吟味する。 ②自然環境の中での体験を一緒に支えてくれる地域人材を発掘する。 ③児童の思いに寄り添いながら「価値ある体験」を実践する。 ④体験のやりっ放しにならないように、事前に目的意識をもてるようにしたり、事後に振り返ったりするなど、効果的な授業展開を工夫する
実践の成果：	本実践を通して各学年の体験活動を見直すことで、我々教師自身が体験活動の重要性を再認識することができた。それにより、校内研究(生活科・理科)でも活用することができ、生活科・理科を始めとする、各教科領域での体験活動充実を図ることができた。
成果として特に強調できる点：	児童の思いや願いが高まり、体験活動が充実したことで、児童は自分と地域の自然との関わりや、自分と地域の人々との関わりについて気づくことができた。そして、その関わり感謝の気持ちを抱いたことで、地域に愛着をもち、自分は地域の中の一員だという自覚をもたせることができた。

成果報告書

2011 年度助成	所属機関	相模原市立麻溝小学校
タイトル	価値ある体験を生み出す、地域の自然を生かした環境学習	

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）
2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）
3. 実践の内容
4. 実践の成果と成果の測定方法
5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）
6. 成果の公表や発信に関する取組み
7. 所感

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

本校の学区は、文化的にも自然的にも環境に恵まれている。生活科、理科、総合的な学習の時間などで、これらの自然環境に関わるとき、児童は目を輝かせながら活動をする。本校の学区にある自然環境をより効果的に活用するためには、これまで行われてきた活動が児童にとって「価値ある体験」であるかどうかを再度見直す必要があった。

「価値ある体験」とは、①児童が楽しみ、主体的に関われる体験。②新たな発見や驚きがある体験。③将来に向けて夢や希望を感じられる体験。であると考えた。これまでの体験でも、児童は自然に親しみ、活動を楽しんでいるが、「価値ある体験」にまで高めるには、活動の内容や授業展開を検討する必要があった。

本実践では 本校の学区にある自然環境をより効果的に活用するために、従来の活動が児童にとって「価値ある体験」であるかを見直し、その「価値ある体験」を積み重ねることで、児童に地域のこと好きになり、地域のことをよりよく知ろうとする態度や、将来にわたって地域に関わっていこうとする気持ちをもてるようにすることを目的とした。

2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

まず、これまでの各学年の体験活動が、児童にとって「価値ある体験」であるかを見直した。各学年の年間計画に位置づけられている体験活動について、①児童が楽しみ、主体的に関われる体験。②新たな発見や驚きがある体験。③将来に向けて夢や希望を感じられる体験。の3点の視点から再検討をし、1年間でこの「価値ある体験」①②③を児童が体験できるように再計画をした。

また、校内研究のテーマを「探究力のある子の育成～生活科・理科の学習を通して～」とし、児童が自分なりの思いや願いをもち、それらを達成する力（探究力）を育てることで、児童の主体的な問題解決の力を育成し、体験の価値をより高められるようにした。

そして、その「価値ある体験」を、児童一人ひとりがどっぷりと体験し、中身の濃い活動となるよう、活動に必要な材料、道具、視聴覚機器の準備や、地域人材の発掘や協力者との打ち合わせを行った。

3. 実践の内容

1. 地域の自然環境と関わる活動が、児童にとって「価値ある体験」となるように活動内容と授業展開を吟味する。

○各学年の活動の検討、計画の作成

各学年で行っている活動が「価値ある体験」であるかどうか。内容や授業展開のどの部分を修正したら「価値ある体験」になるか。を明らかにし、各学年で検討した内容をもとに、「価値ある体験を生み出す、地域の自然を生かした環境教育」の学習プラン（別添参照）を作成した。

2. 自然環境の中での体験を一緒に支えてくれる地域人材を発掘する。

地域の農家、農協営農センター（育苗所）、河川環境管理団体への活動補助・活動協力及び講演の依頼等、「価値ある体験」に必要な地域人材を発掘した。また、次年度も引き続き協力していただけるよう、連絡時期や連絡先などの必要事項をまとめたファイルを各学年で作成し、引き継ぎ資料とした。

3. 児童の思いに寄り添いながら「価値ある体験」を実践する。

○1年生 「麻っ子農園や相模原公園での活動や季節の自然に触れる活動（生活科）」

〈麻っ子農園〉 れんげ摘み、どろんこ遊びなどの自然体験活動や田植え、稲刈りの見学。

〈相模原公園〉 施設（遊具や動物園）を利用した遊びや、凧揚げ、はねつき、竹とんぼなどの昔遊び。

〈自然活動〉 ドングリ拾いをきっかけとした秋の実集め。飾り物作りやゲーム。児童同士の発表会。

○2年生 「サツマイモの栽培活動や地域の自然にかかわる活動（生活科）」

〈サツマイモ栽培活動〉 地域の農家の協力の下、学校近くの畑を借りサツマイモの栽培・収穫を体験。
ツルを使ったリース作り、サツマイモ味噌汁調理、農家の方へのお礼の手紙。

〈生き物見つけ〉 地域の自然観察・生き物探しや四季の変化を感じる活動。

○3年生 「道保川での植物や動物とかわる活動（総合的な学習の時間）」

河川環境管理団体「道保川を愛する会」の協力の下での、学校プールの「ヤゴ救出作戦」、道保川の生き物の生態調べ、表現活動、川の清掃活動、児童同士の発表会。

○4年生 「季節と生物（理科）」

〈道保川や四季を通した校庭の自然観察。〉

地域を流れる川（道保川）の自然観察。校庭の自然観察。観察した対象を観察カードに記録し変化を比較し、名前や特徴を図鑑などで調べまとめる。観察カードを模造紙にまとめた校庭の自然マップ作り。

○5年生 「麻っ子農園での稲作体験（総合的な学習の時間）」

米作りへの動機付け、稲作の過程（しろかき～脱穀）の体験、昔の道具に触れる、餅つき、お米を使った調理実習、月1、2回の観察活動、協力者へのお礼の手紙、ワークショップ型グループ発表、個人発表。

○6年生 「地域を見つめ直す活動（総合的な学習の時間）」

地域を流れる川（八瀬川）の浸食によって現れた地層の観察（理科）、地域の今と昔を考える（調査、表現活動）地域を流れる4本の川の調査、住みよい地域にしていくために必要なことを考える、環境保全活動、低学年への発信、パンフレット作り等。

4. 体験のやりっ放しにならないように、事前に目的意識をもてるようにしたり、事後に振り返りするなど、効果的な授業展開を工夫する。

低学年では、導入時から地域の自然に触れたり、栽培活動を行ったりするなど、体験にどっぷりとつからせることで、「こんなことをしてみたいな。」「もっとこうしたいな。」という思いを抱かせることを大切にしたり。中学年や高学年では、事前の観察活動や、体験活動などの動機付けを行うことにより、目的意識をもって活動できるよう工夫した。ふり返り活動では、どの学年でも学習成果を友だちと共有したり、他学年や保護者等に発信したりするなどの表現活動を取り入れた。また、活動に協力してくださった地域の方達へお礼のお手紙を書くなど、関わってくれた人達への感謝の気持ちをもてるようにした。

4. 実践の成果と成果の測定方法

1. 児童に関する成果

本実践は、本校の体験活動が児童にとって「価値ある体験」であるかを①児童が楽しみ、主体的に関われる体験。②新たな発見や驚きがある体験。③将来に向けて夢や希望を感じられる体験。という3つの視点で再検討し、児童に「価値ある体験」をさせることを目的として行った。その結果、児童について以下の変容が見られた。

○児童の思いの高まり

活動をしているときの児童のつぶやきや会話の中には、「もっとこうしたいな。」「こうするにはどうしたらいいかな。」「このことを伝えたい。」「そのためにこうしたい。」などの言葉が多く聞かれた。また、集中して活動に取り組んだり、活動中、自然に友だちと意見交換や相談したりする姿が見られた。これらのことから、児童が活動に対して主体的に関わり、自分事として活動していたことが分かる。児童に、次の活動につながる言葉や行動が表れるようになったのは、児童がじっくり活動に取り組み、児童の「こうしたい。」という思いが高まったことが理由として考えられる。

○価値ある気づき

「サツマイモが大きくなるまでは、こんなに時間がかかるんだね。」「お米を作るのってこんなに時間がかかるんだ。」地域の畑や田を借りて作物をつくる活動をすることで、食卓に並ぶ食べ物が大変な時間と手間をかけて作られることに気づいた。さらに自分たちで作った作物を実際に口にすることで、「食べることは、命をいただくこと。」ということを実感した。また、地域の川や自然の中でたっぷり活動することで、動植物を含む自然の連続性や、季節による変化に気づいていた。

それだけでなく、農作業に携わる人々や、自然を守る活動をする人々に直接指導していただいたり、お話を伺ったりすることで、その人達の思いや願いに直接触れることができた。児童は、事後にお礼のお手紙を作成することで、改めて関わっていただいた人達への感謝の気持ちをもったり、自分が地域環境とたくさん関わってきたことに気づいていた。これらのことが、「自分と自然との関わり」、「自分と地域の人々との関わり」、への気づきとなった。

そして、自分たちの住む地域の歴史、文化、自然に改めて触れることで、これからの自分たちには地域の伝統文化の受け継ぎ、伝えていく役割があることを自覚し、地域の中の大切な一人であることに気づかせることができた。

2. 校内研究「探究力のある子の育成」との相乗効果

本実践を進めていくことで、生活科・理科においても体験の充実が重要であることがわかった。生活科では、導入の体験や試行錯誤の体験を十分にさせることで、理科では、導入でたっぷりと体験させたり、自分たちの予想を確かめるための実験の機会を十分に保証したりすることで、児童の不思議に思う気持ちや、「こうしたい」という思いが高まり、生活科・理科への学習意欲が高まることが明らかになった。生活科・理科に関するアンケートでは、「生活科・理科の勉強をたくさんしたい。」と回答した児童は全校で90%を超えており、各教科領域でも体験の充実を図ることが大切だとわかった。また、生活科・理科で学んだ問題解決の学習過程や実験観察の技能を、様々な活動の場面で生かそうとする様子も見られ、横断的な指導をすることができた。

3. 体験活動の見直しと、学校と地域とのつながりの強化

本校は、以前より地域とのつながりが深く、様々な体験活動を行ってきた。しかし、中には廃止の

検討をされていた体験活動や、なぜその学年その時期に計画されていたのかわからず、形骸化されてしまっていた体験活動もあった。しかし、本研究の機会を得ることで、それぞれの体験活動のねらいや価値を教師自身が再認識する機会となった。例えば、5年生で行っている稲作体験は、以前は稲作の過程を体験する活動が各学年に振り分けられていたが、社会科との関連や児童の学びの高まりを考え、稲作体験を全て5年生で行うよう改善した。このように、一つひとつの体験活動を見直すことで、教師の体験活動そのものに対する認識が大きく変わった。

また、体験活動の事前に講師の方達と打ち合わせを重ねたり、実際に教師自身がその体験を行ったりする過程で、地域の方達と活動内容や世間話をするが増えた。このことで、地域の人達と教師が「顔見知り」になることができた。地域と学校をつなぐ役割を、児童だけでなく教師も担うことができたのではないかと感じた。

5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

○校内研究「探究力のある子の育成～生活科・理科の学習を通して～」へのさらなる活用

前述の通り、本実践は校内研究にも成果をもたらしている。本校の生活科・理科の研究は本年度が1年目であり、今後更に研究を深めていく。本実践で学んだ「価値ある体験の充実」を、今後の校内研究で更に追究し深めていくことで、児童の豊かな学びの一助としたい。

○「将来に向けて夢や希望を感じられる体験。」の充実を図る

今回の実践では、児童は地域へのつながりや感謝を感じることができたが、将来に向けての夢や希望を感じることは、教師の手立てが不十分ではなかったかと感じた。それは、地域への発信が感謝のお手紙や、授業参観での発表などに限られたことも原因の一つである。今後、公民館や自治会を始めとする広い範囲への発信を考える必要がある。児童が地域社会に直接関わる機会を設定することで、より地域とのつながりが深まり、地域の中で必要とされる自分を感じることができるのではないかと感じた。そうすることで、地域環境に対して、より具体的な夢や希望をもてるのではないかと感じた。

6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載されたり放送された場合は、ご記載ください

啓林館ホームページ内「私の実践・私の工夫（生活）」にて、1年生 生活科実践「あきってきもちがいいね」を掲載。

7. 所感

本実践から明らかになったことは、1年生から6年生までの体験の「つながり」の大切さである。

低学年では生活科で広く地域の自然と関わり、中学年、5年生では、理科、社会科とも関連させて地域の自然や文化に深く関わる。そして6年生では、教科と関連させながら、改めて地域の歴史、自然、文化に目を向け、地域との関わりを更に深める。

このように、児童は6年間を通して体験を重ね、地域環境を深く理解し関わりを深めていくことで、地域への愛着をもつことができると考える。我々教師が、6年間を見通して各学年の体験活動について考えていくことで、各学年の体験活動に強い「つながり」が生まれ、本校の体験活動が児童にとって本当の「価値ある体験」になると言えるだろう。

本実践では、「価値ある体験」迫ることを通して、我々教師自身が体験の「価値」について考えるきっかけとなった。本実践で学んだことを、今後の校内研究に生かし、「価値ある体験」の充実を図っていきたい。